

第六章

四つ葉のクローバー

セーター

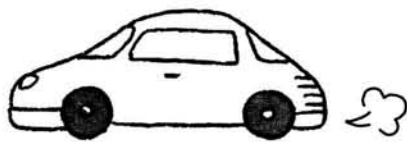
東灘区 小林発巳（八十二歳）

阪神大震災の年末、私の勤め先に鈴木敦子という名の訪問客があった。ただ、私が居たにもかかわらず会おうとせず、手紙と紙袋を置いて帰ってしまった。それを受け取った時、私はうかつにもすぐに中身を確かめなかった。程なく、中をのぞいてハッと胸を突かれた。

地震直後、私は避難した六甲山裏の娘の家から、車で勤めに出ていた。ある朝、新神戸駅付近で寒さげな身なりの母娘を車に乗せた。倒壊した自宅の壁土の下からはい出して命を拾ったという話で、「その日は、避難所の窮屈な生活を少しでも手足を伸ばしてしのいでは、という娘さんの勤め先の好意で、元町の寮で一夜を過ごし、今から避難所の東灘小学校まで歩いて帰るところだ。」ということであった。母親の方は大分疲れの色が見えた。遠路を歩かなければならぬ母の疲労を思つて、あえて私の車をたたかれたのであったろう。車は渋滞して一寸ずつだった。道脇は見る影もない惨状で、人々はなりふりかまわぬ服装で荷物を抱えて黙々と歩いていった。やがて全壊した私の家近くまで来ると、もうこらでいいと言われて車を止めた。幸い家から持ち出した物を車のトランクに入れていた。その中から家人のセーターと傘を取り出して、「寒さしのぎにしてください。」と言つて、差し上げた。固辞されたがあえてもらつて戴いた。当時は誰もがする事だった。先方の名を聞き、私の名と勤め先を告げて別れた。

それから一年近くが過ぎ、私はその名を忘れていたが私の名は覚えてもらつたのだ。私に届けられた紙袋には、きっちり折り畳まれたセーターが二つ、それに手紙、商品券とクリーニング代と書いた封筒が入っていた。手紙には、あの時私の車に乗せてもらったこと、その際大切なセーター等を借りたこと、年末になるまで心ならずも返せなかったことの礼とわびが記され、それが自分たちの励みとなつて無事に穏やかな年末を迎えることができた、とあった。名前はあつたが住所はなかつた。私は紙袋を前に唸り出したい衝動に駆られた。もともと返してもらおうなど思いもしなかつたものを、この一年ずっと考えてもらっていたのだ。倒壊した家の中から命からがらはい出された以上、この一年不自由をされているのは目に見えている。こんな時だ、それを使い捨てられても当然のことだ。それなのに……その謙虚で澄んだ気持ちが胸に鮮やかに染みわたつた。せめて無事に穏やかな年末を迎えられた、という文句が救いであつたが、それとて仮設の一部屋での母娘二人きりの寂しい様子が思い浮かんで胸が痛んだ。

私は何としてもその所在が知りたくて、かつての避難所や区役所を訪ね歩いた。「鈴木さん、お住まいを知らせて下さい」という新聞投書もしたが反応はなかつた。ただ、手紙を置いて帰られる時、私の住まいをメモして帰られたという。それが頼りかと思つた。ひよつとして賀状でも来て、それに住所でも書いてもらえないか、と願つた。それはかなえられなかつたが、幸運にその住まいを知り得たら、お心にお礼が言いたい、そして、今度は新しいセーターをプレゼントしてぜひ受け取つて戴きたいと、それは果たせぬまま今も思い続けている。



忘れることはない

東灘区 小林きよ（七十七歳）

激震に襲われて二十四時間がたととしていた。私は、被災者でギューギュー詰め御影高校の体育館の中にいる。足を動かしたら、もう二度と足は元に戻せない。首筋の向こうから熱い唸り声がするが、後ろを振り向くことさえ出来ない。

平成七年一月十八日の朝はまだ明けない。思えば大地震から今まで一滴の水も飲まず、パンの一かけらも口にしていない。だのに不思議に少しもお腹が空かない。それどころかトイレにも行っていないことに気が付いた。「長い」という言葉では到底言い表せない長がアイ、長がアイ一日だった。

体育館はまだまだ余震に震えている。そのうえ、糞尿の異様なにおいが刻々と充満して濃厚になつていく。

誰も何も喋らない。何を考えているのだろう。あまりにも恐ろしくて喋れないのだ。

ふと、体育館の天窓を見た。小さな天窓にはまんまるい月がちょうど斜めに動こうとしている。

「お月様、助けて下さい。お願いします。」

月は冷ややかに私を見て

「どうしようもないの、ごめんね。」

と言った。

その時、コトンと小さな音がした。どうやらあの木の音は、隣の人が袋に入れて持ち出して来た位牌が飛び出して床に落ちた音らしい。私は、壁土の中から拾い出して持ってきた夫の位牌が袋の中にあるかを手探りで確かめた。

こんなギューギュー詰め避難所で、誰か大声で喧嘩でも始めたらどうしよう。どうか、そんなことにはなりませんように。

「どうかお助け下さい。お願いします。」

お月様は、もう小さな天窓にはいなかった。やがて、東の空が明るくなりはじめた。

「あ、嬉しい。明るくなる！」

明るくなるってことは、こんなに嬉しいことだったのか。

婿に助けられてひと先ず東京へ。

全壊の我が家に貼ってあった紙片を、ジャンパーのポケットにねじ込んだ。紙片はTさんからのメモで息子さんの家の電話番号が書いてある。東京中野だ。

電話のむこうでは確かにTさんの声！

声にならない。

すぐJR中央線武蔵小金井駅で出会う。

「Tさあん！」

「小林さあん！」走り寄るのも、もどかしく抱き合った。

号泣した！

言葉は何もない。

涙がからだ全体から飛び散った。

武蔵小金井駅を通る人々はどんなに驚いたことだろう。どんなにびっくりしただろう。おかしかったかもしれない。阪神淡路大震災と武蔵小金井駅前で泣いて抱き合っている二人の女とは、結び付かなかったかもしれない。

涙でポトポトになったハンカチを握りしめて、ポロポロ泣きながら歩いていると、滄浪泉園へついてしまった。犬養毅によつて名付けられたという滄浪泉園は、武蔵野の自然をそのままに留め、人の心を癒す森と言われているだけあって、やつとTさんも私も涙を乾かした。

この日のことを書き留めておかなければ……と仲間がみんな決めて作った文集が「しん」だ。嬉しいことに「しん」は二号、三号と続いて発刊、今年は十年目で十号を出すことが出来た。

「震」から始まって、真・新・親・針・診・森・振・深と続いている。



崩壊したJR六甲道駅

観音様

灘区 赤塚幸子（八十五歳）

毎年一月の連休にはお遍路に行っています。帰途小豆島の福田港を夕五時二十分の姫路港行きに乗って帰宅は十時すぎ。それから入浴、洗濯して床についたのは十二時すぎ。

朝いつもは五時には起きて台所にいるのですが、今日はちよつとゆつくりしようと寝床にいました。目はさめていましたが、突然「ドーン」と突きあげられました。地震だと思いました。瞬間お水が顔にかかりました。寝床より一メートル程の所の仏壇の水です。お茶はさげてあったのですが、お水が年中あげてあります。そのお水をかぶったのです。これはただごとではないとすぐに廊下に出ました。その直後大きなゆれがつづいて、タンスと本箱もあらゆるものが倒れ、部屋中、山のようにです。

御近所の方の「赤塚さん大丈夫」と声がして玄関のドアを開けました。ドアが開いたのでやれやれと思いました。小路は向い側の家が倒れて山になっています。大通りに出る事ができません。皆で私の庭を通り裏の塀をたたき割ってブロック六段をこえて脱出、裏の大きなガレージに出ました。見たかぎり、まともな家はなく皆倒れています。

一人暮しの姪が心配で大通りを北へ歩きました。阪神電車もJRの高架も落ちて道路をふさいでいます。姪の家は傾いていましたが下敷きになる程ではありません。でも姪は見あたりません。行き違いになったのです。階段が半分落ちて階下におりるのが大変だったといいながらお互いに無事をよろこびました。

朝食も昼食も何もたべていません。寒いので街角でたき火が始まりました。材料はいくらでもあります。近所の人々が傾いた台所にもぐりこんで、かかえてきたお餅をたき火で焼いたのを二個よばれました。夜の布団をと家にかえり、押入れをあけようにも倒れた物で十センチ程しかあきません。手にさわった夏の薄い布団を引きずり出しました。それをかかえて今夜の寝床を求めて二人で歩いていくと、市の環境局の前で「どうぞどうぞ。」と声をかけて下さいました。二階にあがるとすでに人がいっぱい、廊下の突きあたりでダンボールを二枚もらって床に敷き、布団一枚を下に、もう一枚を二人でかけあつて横になりました。

二階の北の窓から眺めると遠くで交通信号が点滅しています。阪急六甲あたりとか。こちらは停電で真暗、懐中電灯がたよりです。

これが四月終わりまでの、着のみのままの避難所暮らしの始まりです。食事は前日作ったおべんとうが届きます。水の配給、毛布の配給、ボランティアの人が豚汁をたいて下さったり、水洗便所の水を三階まで運んで下さったり、いろいろ皆様にお世話になりました。避難所ではよい人ばかりで明るい雰囲気です。合宿しているようでした。

朝明るくなると家に帰つて中の片付けです。洋服ダンスも和ダンスも本箱も重なりあつて倒れています。七十六才の私の力ではどうにもなりません。仏壇は軽いのでおこして下壇の上に据えました。

私は仏像を長年彫っています。私が彫った観音様（二十センチ位）を仏壇上段の左側にまつていました。仏壇をおこすと、その観音様が元の所に立つて居られたのです。私にお水をかけて「早よ起きよ」と観音様がおこして下さいのだと思いました。主人や子の位牌は二十日程して掘りこたつの中から出てき

ました。観音様に私は助けられたと信じています。

二・三日して世話になつて工務店から二人来て、屋根にシートを掛け、二階洋間のドアの前の障害物をのけ、倒れた物を元通りに起してくれました。

道路上の倒れた物を除かないと水道もガスも工事ができぬといわれました。電気は割合早くともりました。残念なことは、半壊の家から冷蔵庫や洋服等をぬすむ人が出てきたことです。そのため夜警団を組んで六人で街を回っていました。

今生きているのは大勢の方のお力添えのおかげと、観音さまのお慈悲のおかげとよろこんでいます。生きている間は感謝の気持ちで、もう少し生きて行こうと思つています。ありがとうございます。



ネズミに助けられて

東灘区 横田紀子（六十四歳）

十年近くなると記憶も薄れてきますが、一番思い出すのは、「私はネズミに助けられた」ということです。震災の二週間位前から、私の寝ている部屋の天井裏で、ネズミが騒ぎ出しました。始めは不思議で、出入りの大工さんに調べてもらいましたが、ネズミ一匹出入りする所は無とのこと。

しかし夜毎に騒がしきは増すばかり。私は犬と猫と一緒に寝ていましたが、二匹が興奮して天井を見上げて一晩中鳴きます。揚げ句に、私の顔に砂が落ちて来る程のネズミの暴れよう。たまりかねて寝所を北西隅の部屋に移した四、五日後にあの地震です。タンスや屋根の下敷きになりましたが、タンコブ位で助かりました。

丁度その日はお茶会があるため、本来なら起きていて、台所に居るか、着物に着替えていたはず。両所共ガラスが飛び散り、大きな梁が落ちていたり、きつと助かつてはいなかったでしょう。これはきつとネズミが助けてくれたのでしょうか。

私の家は二百年以上も前の建物で、ガラス戸等も昔の手造りで、少々外の景色が揺らいで見えるような風情がありました。歴史的にも価値の有る品々も取り出せず、一瞬のうちに土に帰してしまいました。

ちなみに猫のミーコは壊れた家から一週間後に出て来ましたし、犬のヒロコは縁の下で半日気を失っていました。

十月半ばに京都でお茶会に招かれ、始めて着物を着、一服のお茶を静かに飲んだ時、思わず涙があふれ、生きていて本当に良かったと思えました。生きているからこそ味わえた静寂が、心身に染み渡りました。



異状な環境で得たもの

兵庫区 吉田佳春（六十八歳）

阪神大震災は、電気、ガス、水道等の主要なライフラインを寸断し、劣悪で異状な生活環境を体験させた。その反面、人間の優しさや温かさなど数多く感受させた。

倒壊と類焼を免れたものの、正常な生活するには程遠い我が家を離れ、「せめて水道と電気が回復するまで」との義妹の勧めで、北区にある彼女の家にしばらく居候をきめこんだ。翌朝からは、飲料水とトイレの水を車に積み、散乱した家財や食器等の残骸の整理に通うことになった。

いくら片付けても足の踏み場のない暗闇の中で絶望感に打ちひしがれている時、首都圏等の友人から長距離電話がはいり、彼等の励ましの言葉は再起への大きな勇気付けとなった。また半ば絶交状態だった友人は、少しでも早く正確に私の手に届けようと、局留め為替で見舞金を振り込んでくれた。これは手元に持ち合わせの少なかつた私には、当座の買物などに大変役立つ。

その後も依然としてライフラインの復旧の見通しはなく、心細い日々を過した。せめてテレビをみたり音楽が聴けたら、多少の慰めにもなるのにと、疲れた身体を休める時に思った。

ほどなくこの気持ちを通じたかのように、音楽会で面識のある在阪の青年が訪ねて来てくれた。彼はJRの開通を待つて代替バスを乗り継いで、銘菓と共に数本のカセットテープを持参してくれた。疲れ切った家族は、久し振りに味わう和菓子喜び、私は車の運転中に渴望していた音楽に身も心も浸ることがで

きた。彼の好意は停電状態を知っての好意であった。

それと前後して画家の坪谷令子先生から大型の封筒が郵送されて来た。中身は高校時代の友人灰谷健次郎の新聞連載小説「天の瞳」の切り抜きのコピーであった。当時は新聞の配達は円滑に行われず、彼の小説をしばらく読んでいないことを知った彼女の好意であった。挿絵等で多忙な日々を送られていた先生の手を煩わせたことは今も恐縮に感じている。

その後に来る経済的苦境の中で、人生のたそがれを歩む私には数々の御好意が生きるかてになっていることを感じ、感謝を覚えるこの頃である。

ともしび

中央区 宮崎茂美（五十七歳）

暗い病室に

一点の月光

カーテンを開ける

やすらかな寝顔を前に

あの……恐ろしき光景



一瞬消え……

この 白衣の重みに救われる

空の空

北区 松澤節代（六十九歳）

震災後一カ月ほどはむなしかった。

私の住んで居た北区は被害の少ない地域ですが、生まれ育った故郷の淡路島北淡町は大変です。激震地区です。古い家が倒れ、子供の頃可愛がってくれた方が亡くなりました。家並みが変わり果て、村の様子がすっかり変わりました。

月日がたつにつれ、私の中に宝が残っているのに気付きました。子供の頃遊んだ田畑、山々、浜、港、親族、同級生、友達と無限に宝が残っています。現在は村も新しい家が立ち並び、新建材を使用した家が多くなり、家並みは昔とは変わりました。けれど住んでいる人々の心は震災前と同じ、変わりません。

夜、ベッドに入って眠れない時は、村の端から順番に、昔の家と屋号とその家族を思い浮かべながら睡眠に入ります。震災前の村が何より私にとって宝です。感謝。

運命とは言いたくない

須磨区 奥村やすゑ（八十歳）

最近多発する外国での地震やテロ事件で、幼い子達までもが被害に遭う様子をテレビで見ている、その都度悲しくて涙が出て来る。

両手両足を無くした幼い子のこれからの人生はどんな人生が待っているのかと思うと、とても悲しい。どの国の人達も皆幸せであってほしいと私は願う。

九月十月は台風季節で、あちこちの県で大きな被害を受けておられる方々の心痛を、お察し申し上げます。苦しい思いから早く元気になって下さいませ。

私達も天災とは言え、あの忌まわしい出来事に遭い、あれから十年たつてもあの時の後遺症で苦しんでおられる方のお話などを聞くと一緒に涙が出て来ます。

一瞬に家屋もろとも、愛しい嬰兒なごや頼もしい夫、優しくった母、妻、鼻垂れ小僧だった元気な息子が、今ここに元気で居たら：：いやここにはいない。あの日から時は止まった。人は言うが我れには、ひと昔ふた昔も無い。あの前日まで近所の子供達と一緒に遊んでいたあの子どもこの子ども今では立派な大人になっているのに、私の子どもあんな日が無かったら、あの日が無かったら、赤いランドセルを背負い楽しそう



に笑い声をたてて、手をつないで行く後姿が目に見え、涙が頬を濡らす。夜は一層に寂しく悲しくあの愛しい笑顔、かわいい声など走馬灯のように頭の中を巡り枕は幾夜もぬれる。

あれから早や十年、我が腰も曲り夫に手を引かれ老の道を支えながら行こう。

あの日は心に秘めて、あの日は忘れられない。冷たき石となりし我が子よ老の両袖に包みぬ。悪夢の日は再び来てほしくない。或る一人の老婆より。

エンジェル

東灘区 マイケル秋沢

心優しい街 神戸に生まれて

サイレンと喧噪けんそうの あの日から

悲しみを分け合う 切ない人達

眠れない夜を 重ねて

星に語りかける 遠く離れた温度ぬくも

悲しい記憶 迷わずに消せたら

だけど私は エンジェル

恐れずに未来を夢みる
心合わせてエンジェル
溢れる想い 伝えたい

ルミナリエの光 神戸に生まれて
励まし合って生きてきた あの日から
新しい生命に 伝えるためにも
加速する愛を 育てて
つないだ奇跡を きつと私が守るよ
花時計から 希望の風吹いて

だから泣かない エンジェル
恐れずに未来を歌おう
心合わせてエンジェル
溢れる想い 伝えたい

ルミナリエ

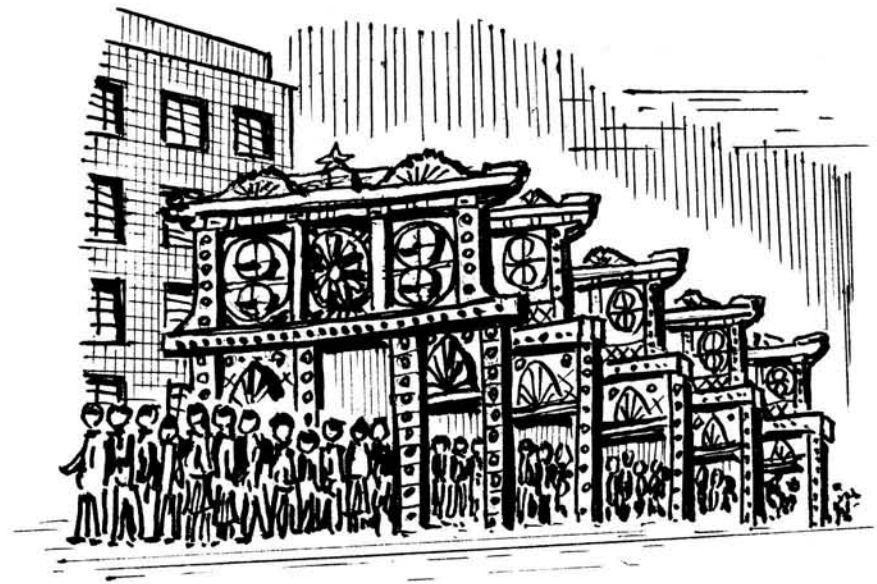
長田区 T・F (四十歳代)

震災時に体験したことは、あまりにも悲惨で思い出したくないことばかりですが、心から感動したものの一つにルミナリエがあります。

震災後の最初のクリスマスに見たルミナリエは、無力感と虚脱感で打ちひしがれながらも、やり場のない怒りを胸に秘めた心に、そっと包み込むような優しさとぬくもりを与えてくれました。まさに、魂が癒されるとはこういうことをいうのかと思いました。まだ街の至る所に瓦礫が残っている三宮の漆黒の闇の中に、宝石のようにきらきらと輝く光の素晴らしさ、その時の感動はとも言葉で言い表わすことはできません。

さらに、ルミナリエ会場に流れる儼かな調べが身体を包み込み、魂が奪われるような感覚になりました。神話の世界に一瞬紛れ込んだような錯覚です。

僅かな出来事ですが、魂が心地よく揺さぶられ、心の中に希望という明かりがとまりました。震災の大切な思い出の一つです。



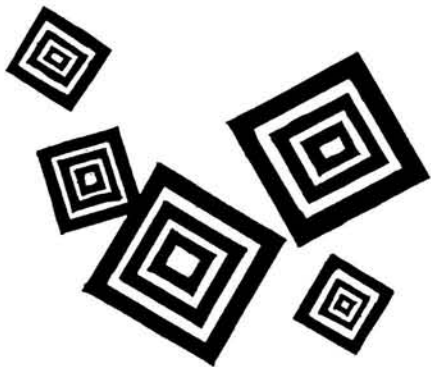
心に残る命の輝き

長田区 神田協子（六十四歳）

忘れようとしても、忘れられない
なんてことない冬の朝 五時四十六分
十秒、一瞬にして人生変わってしまった
神戸に地震 まさか「嘘」 これは「テレビの物語だ」
隣で寝てる主人「これは怪獣だ」
頭まっ白 考える余地なし
何が何だか わからない
外では「地震」「地震」と近所の方が叫んでる
やっとなにかえる
この日から 始まった十年
十年一昔
若かった

振りかえると駆け足のようにでした。もう半分以上記憶もさだかなくなりかけています。

私の住んでる街は長田区内でも激震地区で、多くの建物は壊れ、商店街はみごとに灰になり、多くの方



が亡くなりました。

復興も長引き、最近やっとな現代的な下町になりましたが、若い人達が帰って来てくれず老人の町となり悲しいことです。

当時私はまだ五十代半ばで勤めていました。長い間会社も休業で、会社復興のため社員一同給料なし、自分の失業保険をもらい無給で会社に貢献しました。無我夢中、月日はあつという間に過ぎ去りました。

そして、この年の十二月、私の心に大きな感動を与えてくれたのが「ルミナリエ」です。大震災では幸いにも身内に誰一人としてケガもなく無事でしたが、私の家は全壊、あらゆるものを失ってしまつて、心は「悲しさ」「空しさ」ばかり、いやな性格になりました。「ルミナリエ」。あのまばゆいばかりの「光の輝き。」何とも言葉になりませんでした。

キラキラとした光は一瞬にして天国へ旅立っていった人達の「心」「魂」です。その一つ一つの輝き全部が、私に向かって叫んでいるように聞こえました。「わたしここにいるよ！」「私達を忘れんといて」と。私はその中に吸いこまれそうで、足が動かなくなり、涙さえ忘れて輝きを見つめていました。

「輝き」にも、こんなに悲しい「輝き」があつていいのでしょうか。私の知人も娘さんを亡くされました。その方の「輝き」は、きつと「お父さん」「お母さん」「私ここにいるよ」「忘れないでね」と、悲しく光っていることと思います。

あの感動は、私が生きていくかぎり忘れることはないでしょう。これから毎年十二月の「ルミナリエ」に行かれる方、「輝」の中の「心の叫び」を聞いてあげて下さい。

それから参考のために「ルミナリエ」の事を調べて見ました。「ルミナリエ」とはイタリア語で「電

飾」の意味で光の彫刻作品です。光は闇の恐怖に対し、喜びや安全を導いてくれ、「夢」や「希望」を託し、光そのものもつ数々の魅力に、今日的な意義と精神性が込められた光の芸術作品です。「阪神淡路大震災犠牲者」の鎮魂の意を込めるとともに、都市の「復興」「再生への「夢」と「希望」を託し、平成七年十二月、イタリア人スタッフ十二名の方々が、約十五万個の電球を使用し、総延長約七百九十メートルの作品を旧外国居留地に設置されました。会場は十一日間催され、ロマンチックな神戸の街と市民に、大きな「感動」と「勇気」と「希望」を与えて下さいました。翌年からは、市民からの継続開催を求める強い声が寄せられ、十四日間と拡大したそうです。

そして、これには毎年テーマがあり、第一回「夢と光」、観客数約二百五十四万人、平成九年のテーマは「大地の星たちに捧げる」は、震災復興の先導するイベントとして、「ふるさとイベント大賞」において「選考委員特別賞」を授賞し、大きな評価を得ているとのこと、大変うれしいことと思います。

ある朝、神戸新聞の一面の片すみに次のような記事が載っており、
鴨長明かものちやうめい「方丈記」にこんな一節があります。「月日重なり、年経にし後は、言葉にかけて言ひずる人だになし」

家が崩れる音は、雷のようで、逃げ出せば、大地が裂けた。地震ほど恐ろしいものはないと悟った、と。私は、そんな恐ろしい経験を身をもって体験しました。そして十年が過ぎ去ろうとしています。この大切な体験を、この本が出来ることによつて、私達の息子や娘、孫達に、この生きた「証」として、家の片隅の本棚に飾つて、忘れることなくページをめくつてくれることを祈りつつペンをおきます。